

フジバカマ あれこれ

分 類

キク科ヒヨドリバナ属フジバカマ

和名 フジバカマ（藤袴）、学名 *Eupatorium japonicum*

英名 Thoroughwort, Joe-Pye weed, Boneset

和名の由来

「藤色をした袴」の意味。管状花（小さく分かれた花）から花柱が2本長く分岐して出る。その2本の花柱を袴に見立てたものである。

分布・特徴

本州・四国・九州、朝鮮、中国に分布している。日本のものは奈良時代に中国から来て帰化したものといわれている。万葉の昔から親しまれてきた。8～10月に淡い紫紅色の小さな花をつける。

生草のままではほとんど無香だが、やや乾燥するとその茎や葉に含まれているクマリン配糖体が加水分解されて、オルト・クマリン酸が生じるため、桜餅の葉のような芳香を放つ。

かつては日本各地の河原などに群生していたが、今は減少して環境省のレッドリストでは「準絶滅危惧（NT）」、京都府では「絶滅寸前種」に指定されている。

「フジバカマ」と称する植物が観賞用として園芸店で入手できるが、ほとんどの場合は本種ではなく同属他種または本種との雑種である。ここでは日本古来のフジバカマを「在来種」、園芸店で入手できるものを「園芸種」と言い表す。

文学中のフジバカマ

「萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花」 山上憶良・万葉集

秋の七草は万葉集のこの歌で山上憶良が選定し、今に至っている。「朝貌の花」はキキョウ。

「やどりせし ひとのかたみか 藤袴 わすれがたき 香ににほいつつ」 紀貫之・古今和歌集

フジバカマの香りを詠んだ代表的な歌

「おなじ野の露にやつるゝ藤袴あはれはかけよかことばかりも」 紫式部・源氏物語

夕霧が玉鬘に藤袴を差し出して詠ったときの歌

アサギマダラの訪花植物としてのフジバカマ

秋季、移動中のアサギマダラはフジバカマの花に強い嗜好性を示す。この原因は次のように考えられている。

フジバカマなどのアサギマダラが好んで集まる植物にはピロリジジナルカイド（PA）という特殊な化学物質が多く含まれていて、PA を体内に取り込むために好んで訪花するものと考えられる。取り込んだ PA は自らの防御物質や雄の性フェロモンの原料として利用されていると考えられている。したがってフジバカマにやってくるアサギマダラは圧倒的に雄が多い。

飛来時期の関係で、より開花時期が遅い「園芸種」の方により多くのアサギマダラを見ることができる。在来種の開花を飛来時期に合わせるには、7 月上旬に根元から切り戻す必要がある。

《育 て 方》

病気・害虫

温暖化が進む中で茎や地下茎が高温を好む白絹菌に冒される被害が多くなってきた（白絹病）。植え替えをしたり殺菌剤を散布する。白絹菌は酸性土壌を好むので、土壌を弱アルカリ性に保つのも有効である。日当たりが悪いとうどんこ病が発生する。そのほか、いろいろな病害虫を見出すことができるが、白絹病を除いて重大な結果になることは少ない。

季節・日常の手入れ

日当たりと水分を好むので、乾燥に気を付けて、除草は適時行う。晩秋になり茎葉が枯れてきたら美観を損なうので取り除く。冬の間は地下茎の状態で過ごし、春になるとその節や先端から芽を出して茎を伸ばし、生長する。

日当たり・置き場所

日当たりの良い場所が適している。耐暑性、耐寒性ともに優れているので暑さや寒さ対策は特に必要ない。土壌の極端な乾燥を嫌うので、地植えにする場合は西日を避けた場所のほうがよい。

水やり・肥料

日当たりと水分を好む植物であることに留意して管理する。鉢に植えている場合、生長期の春～秋は土の表面が乾いたらたっぷりと水を与える。休眠期の冬はやや乾かし気味にし、水やりの回数は減らしてもよいが、地中では地下茎が生きているので極端に乾かさないように注意する。どちらにしても一年を通して極端に土を乾かさないようにする。

地植えの場合、土に腐葉土などの有機質がたっぷり入っていれば肥料は必要ない。鉢植えの場合、植え付ける際用土にゆっくりと効く粒状肥料を混ぜ込んでおき、追肥とし春に芽が吹いてから初夏まで、月 1 回程度薄めの液体肥料を与える。また、花後にも同様の液体肥料を与える。液体肥料は普通の草花に与える濃さが 1000 倍のものならその倍の 2000 倍に薄めたものが適当である。肥料が多いと株が軟弱に育ち、花付きも悪くなるので控えめがよい。

用土

比較的水はけのよい土が適している。例えば、赤玉土 5:腐葉土 3:川砂 2 の割合で混ぜた土を用いる。

植え替え

3 月-4 月中旬が植え付けの適期。植え替えの適期は芽を出す 3 月頃。地下茎を伸ばして株がよく張るので、地植えの場合は 3-4 年、鉢植えの場合は 1-2 年に 1 回株分けをかねて植え替える。

ふやし方

株分けと挿し芽でふやすことができる。株分けは植え替えをかねて 3 月頃に行う。掘り上げた（鉢から抜いた）株は古い土をすべて落とし、地下茎 2-3 本で一株になるように切り分け、根を 1/3 ほどに切り詰めてから植え付ける。

（大原のオオムラサキを守る会 藤野）